

第2回ワークショップ企画書

2006年 11月 30日

「小学生のための能楽入門プログラムの開発と研究」プロジェクト

代表：杉田 紫野

“つながる ふくらむ 能の世界 ～見つけよう 能の魅力～”

日時：2007年1月10日 13:25～14:50

場所：同志社小学校 アリーナ

対象：三年生の児童および保護者

〈ワークショップのコンセプト〉

第1回ワークショップでは「体験と学びのブースを通して具体的な能のイメージを構築する」という学習を目標にし、児童が能楽師の指導を、発表会という形で表現することでこれを達成できた。

この学びを生かして、今回のワークショップでは、能楽師が一方向的に教えるのではなく、児童が能楽師と触れ合い、双方向的なコミュニケーションを通して学ぶことを目標にする。

第1回ワークショップに協力いただいた能楽師に来ていただくことで、児童と能楽師の関係を深め、学習を深める時間にできる。

〈ワークショップの形態〉

さまざまな学びの形態をとった第1回ワークショップとは違い、アリーナに三年生全員を集め、鑑賞と体験に重点を置いたプログラムにする。鑑賞には、従来の“観客席と舞台”という鑑賞方法に加え、観察という要素も取り入れ、児童がより多角的・主体的に能楽師の動きを見られるプログラムにする。

また、能楽師と触れ合う時間を持つことによって、児童の「能楽師とのかかわりから生まれる学び・児童同士の学び合い・自分から発見していく喜び」を引き出したい。

〈観察と鑑賞の違い〉

今回、プログラムに鑑賞を取り入れるにあたり、従来の鑑賞教室とは違ったアプローチを考えた。見る場所を固定し、与えられた見方を受け入れる、従来の受動的な鑑賞とは違い、児童が動いてさまざまな角度・距離から能楽師の動きを見、児童が自ら発見すること

を促すのが「観察」である。

受動的な「鑑賞」で能楽師の迫力ある本物の演技に触れ、さらに能動的鑑賞である「観察」で能に近づくことができ、いっそうの興味を引き出せると考えている。

【プログラム】

〔演目〕 金剛流：『殺生石（せっしょうせき）』

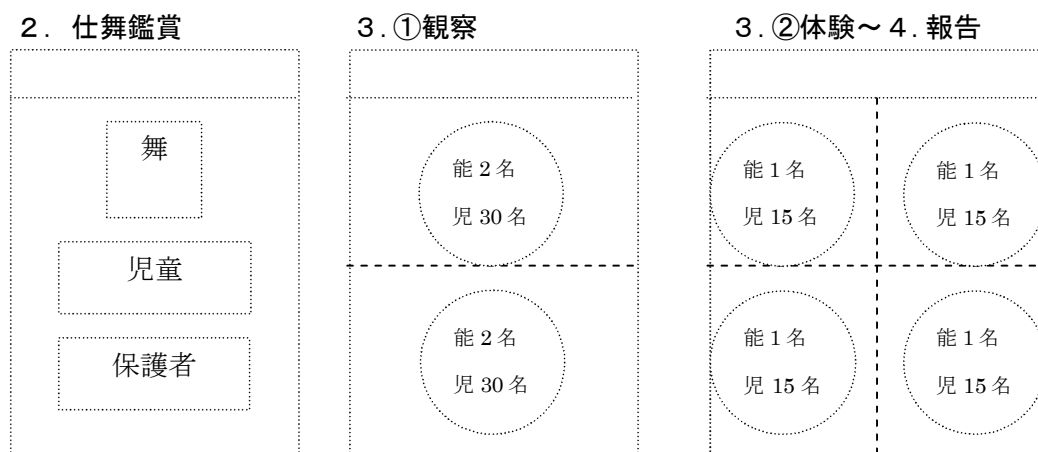
観世流：『鍾馗（しょうき）』

※今回は、各流儀の持ち味がよくわかる演目を児童に見比べてもらうため、また、能の表現の魅力をより理解してもらうため、2流儀で違う演目をお願いした。

| | |
|-------|--|
| 13:25 | 1. 開会式（1日のプログラムの流れ） |
| 13:30 | 2. 仕舞鑑賞（各流儀3～4分程度） 金剛流：『殺生石』 観世流：『鍾馗』 |
| 13:40 | 3. 観察と体験 ①観察：能楽師さんの動きを観察してみよう（10分程度） ②体験：能楽師さんの動きを覚えてもらおう（15分程度） |
| | （休憩 10分） |
| 14:15 | 4. 報告会 |
| 14:25 | 5. 能楽師さんを囲んで |
| 14:45 | 6. 閉会式 |
| 14:50 | 終了 |

※観察と体験の時間配分は、能楽師各氏の指導のペースにより、グループで異なる場合もある。

【各プログラムにおける児童・能楽師の配置図】



《仕舞鑑賞》

〈ねらいと効果〉

○舞台の緊迫感を肌で感じる

- ・第1回ワークショップでは、VTRでしか能楽師の演技を見ることが出来なかったが生仕舞を見ることで、迫力の違いを感じる。
- ・能楽師が面や装束をつけない黒紋付で舞うことで、児童が能楽師の表情や動きをつぶさに見ることができ、能楽師がどのように舞い、謡っているのかなど、能特有の表現を学ぶ。
- ・表情が見える仕舞を、間近で鑑賞することで、舞台芸能の緊迫感を肌で感じることができる。

〈実施方法〉

60人の児童の前で、観世流・金剛流の能楽師が、各流儀1曲ずつ仕舞を披露する。ステージは使わず、児童から能楽師の表情が見やすいように、児童と同じ高さになるようにフロアで舞う。

能楽師は各流儀2名ずつ来られるため、1名がシテ（舞）、もう1名が地謡（謡）を担当する。

《観察と体験》

〈ねらいと効果〉

○それぞれの児童が独自の観点から、能の魅力・特徴を見つける

- ・「なにを表現した動きなのか」を考えながら見ることで、想像力を膨らませることができ、集中力が身につく。
- ・観察を取り入れることで、自ら学びたいという気持ちを持たせる。
- ・さまざまな角度から能楽師を見ることで、動きのイメージを豊かで明確なものにする。
- ・観察で感じた「やってみたい」という気持ちを体験につなげることで、学びが定着しやすくなる。
- ・観察に対話を取り入れることで、その後、体験する型の動きの意味をスムーズに理解できる。
- ・見て学び、体験して学ぶことで、ひとつのものを多角的に見る力がつく。

〈実施方法〉

- ①観世流グループ・金剛流グループに、30人ずつ分かれ、能楽師2人を取り囲む。
(見る場所は指示せず、好きな場所・距離から見る)
- ②仕舞鑑賞と同じように、短い仕舞を舞ってもらう。
- ③児童が能楽師に質問したり、もっと見たい動きをリクエストしたり、観察を深める。
- ④流儀のグループをさらに2つに分け、能楽師1人と児童15人のグループを4つ作る。
- ⑤観察で興味を持った動きを、能楽師に教えてもらう。

《報告会》

〈ねらいと効果〉

○学びの共有

- ・自分たちの学びを表現し、伝えることで、アウトプットする喜びを感じる。
- ・他のグループの学びを知ること、自らの学びの振り返りになる。
- ・別の学び・演目を知ること、自分の学びをふくらませることができる。

〈実施方法〉

- ①4つのグループが、アリーナ中央に集まる。
- ②1グループずつ、学んだ動きを発表していく。
- ③能プロメンバーが報告会の司会を務める。

《能楽師さんを囲んで》

〈ねらいと効果〉

○能楽師と児童の触れ合う機会を持つ

- ・座談会形式で、能楽師との距離を縮めることができる。
- ・児童が質問し、能楽師に答えてもらうことで、児童と能楽師だけでなく、児童同士が学びあう時間にできる。
- ・年齢の離れたプロの話聞くことで、社会を学ぶことができる。

〈実施方法〉

- ①「観察」プログラムと同じ、2人の能楽師と30人の児童のグループになる。
- ②能楽師と児童が車座になり、あらかじめ考えてきていた質問を能楽師に投げかけ、能楽師に答えてもらう。能楽師からも児童に質問してもらい、双方向のコミュニケーションの場にする。進行は能プロメンバーが行うが、能楽師と児童の直接的なコミュニケーションを尊重するため、できるかぎり児童の自発的な発言にまかせる。

【事前学習について】

第1回ワークショップ同様、プリントによる事前学習を考えている。

ストーリー紹介のプリントを作成する予定であるが、加えて、《能楽師を囲んで》での能楽師への質問を考えてきてもらうための参考になるプリントも配布する。

【今回の協力者】

○能楽師

金剛流シテ方：廣田幸稔氏、宇高竜成氏

観世流シテ方：橋本光史氏、橋本忠樹氏

○撮影

未定：若干名

【必要な機材】

- ・記録用ビデオカメラ…数台（能プロが用意）

【同志社小学校へのお願い】

- ・事前学習プリントを作成するので、配布をお願いいたします。
なお、冬休みに児童が読めるように、年内（12月22日まで）に配布できるよう、作成いたします。
その際、保護者の方といっしょにプリントを読むこと、当日能楽師さんに質問したい内容を事前に考えてくることなどをお伝えください。
- ・今回のワークショップも保護者の方にお越しいただきたいと考えております。保護者の方にお知らせをお願いいたします。
- ・プログラム3の「観察」では、児童がざわついたり、動いたりすることが考えられます。児童同士が興味を持った部分について言葉を交わしたり、自分の見やすい位置に動くにあたって、結果的に多少ざわついたりすることは構わないと考えております。

また、見やすい位置に移動するのは演技の合間を想定しておりますので、演技中には動かないように、と児童の皆さんには事前に説明をさせていただきます。

「観察」においては、見せ方を強制するのではなく、児童の自由な見方にまかせたいと考えておりますので、ご協力をお願いいたします。

◎小学校への確認事項

- ・児童を座らせる場合、床の上に敷く敷物を用意し、その上に座らせる（イスを使用せず、正座させる）ことは可能か。
- ・グループ分けは、7月のワークショップで分けた金剛流・観世流のグループに分けることは可能か（前回と同じ能楽師に来てもらうので、ぜひ、前回指導してもらった能楽師の指導を受けてほしい）。
- ・グループ分けの名簿は事前にいただけるか（能楽師が指導をスムーズに行うためにも、前もって児童の名簿をいただきたい）。
- ・当日の児童の服装は、体操服と靴下でお願いしたい。
- ・第1回ワークショップで使用した扇について、どれくらいの児童が保管してくれているか（保管している数により、不足分を補充するか、あらたに全員分を購入するのか検討したい）